

佐土原キリスト教会 2023年7月23日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章1～3節

説教題：幸福なるかな、心の貧しき者

私が、まだ若い頃、それなりに自分のことで悩んで、人生訓、処世術のようなことが書いてある本を読み漁ったことがあります。「大きな人間」とか、「道は開ける」とか、そういう題名の本だったように覚えています。確かに中には、色々な調査や経験談に基づく、説得力のあるものもありました。「問題にぶつかったら、最悪の状態を考え、覚悟を持つ」とか、そういったことです。しかしある時、私は思いました。これらの本に書いてあることを私が実行したとしても、その著者達は、私に対して何の責任も取ってくれない、そう感じたのです。そして、そこが「聖書」の言葉と決定的に違うところだと思いました。「聖書」の言葉というのは、生きておられる神様が、イエス様が、言葉の背後におられ、責任を持って下さる、そういう言葉だと感じたのです。特にイエス様の説教には、そういうことを感じます。

さて、今朝からいよいよイエス様が心血を注いで語って下さった「山上の説教」を学んで行きます。どの教派のクリスチャンもそうだと思いますが、メノナイトも—(その前の『アナバプテスト』と呼ばれた時代から)—「山上の説教」を大切にされて来ました。「聖書」の中で最も大切な箇所だと位置づけて来たと言っても良いでしょう。なぜなら、5章1節に「イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た…イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた」(1)とありますが…。「山に登り」というのは、「旧約」の律法が山の上でモーセに与えられたことと対比されています。「旧約」の律法に代わる、「新約」の律法—(祝福の戒め)—がこの山の上で与えられたことを強調します。「おすわりになると」、これは当時のラビが正式に教える時の姿勢です。イエス様の正式な教えだということです。「口を開き…教えて、言われた」、この書き方も「重大なことを語られた」ということを言い表す書き方なのです。つまり「山上の説教」の中にはイエス様がその伝道生涯で語りたかったと思われたメッセージが凝縮されているのです。だから多くの教派が「山上の説教」を特に大切に考えるのです。

今日は第1回なので、初めに「山上の説教」のイントロダクション的なお話を少しして、それから本日の御言葉の学びに入ります。

1：イントロダクション～

「山上の説教」はそれを生きる者を「神の国」へ引き入れる

イントロダクションとして申し上げたいのは、『山上の説教』とはどういうものかということです。こんな話を読みました。「音速の壁を初めて破ったテスト・パイロット」の話です。音速(マッハ)の壁を破る挑戦は、何度も何度もなされたそうですが、沢山の失敗がありました。機体が爆発したりもしたのでしょう。その沢山の失敗を通して1人のパイロットがある現象を発見しました。「音速の壁が破れようとする時、色々なことが反対に作用する」ということでした。それまで音速の壁を破ろうとする時、パイロット達は、機体の機首を上に向けようと操縦桿を引いていたそうです。しかし彼は、機首を上げるためには操縦桿を逆に押し下げようとしなければならぬのではないかと思ったのです。そして実際に飛行機に乗ってやってみました。その結果、彼は世界で初めて見事に音速の壁を破り、その先の世界を見たのです。ある神学者が『山上の説教』とは、正にそれと似たような話ではないか」と言うのです。「イエス様は、イエス様に従う人々を、音速の壁を越えて、その向こうに広がる世界に連れて行こうとしておられる。その壁を破る方法は、一見非常識に見える方法なのだ」と言うのです。確かに「山上の説教」は、一方で非常に美しい言葉です。しかし他方で、一見非常識に見えるような—(「とてもそんなことは出来ない」と思えるような)—言葉が沢山あります。しかしそれこそが、私達を壁の向こう側—(「神の国」)—に引き入れる言葉なのです。

私は時々、神様を遠くに感じるがあります。先日もどうして良いか分からずに、後ろのテ

一ブルの回りをグルグル歩き回りながら神様に呼びわりました。「神様を経験させて下さい」。しかし実は、「山上の説教」こそが、私達を—(壁を破って)—「神の国」の中に引き入れる—(神を経験させる)—不思議な言葉なのです。私達の側から言えば、その言葉に従うことを通して、私達が「神の国」の中に入り込める、「神の国」を経験出来る、そのような言葉なのだと思います。その意味で、テーブルの回りをグルグル歩き回りながら神様の名を呼ばれるよりも、「山上の説教」を生きようとするの方が良いかも知れません。

さらにもう一言言えば、その一見世の常識と合わないように見える言葉は、その言葉を通してイエス様が「わたしの弟子は、回りの人々の真似をして、回りの人々と同じ価値観で生きてはいけない。わたしの弟子は、世の価値観に対抗する独自の価値観を持って生きていきなさい」と言っておられる言葉であるとも言えます。ですから私達が「山上の説教」を学び、そこに生きる時、世に在って「神の民」として生きるための独自性を持つことが出来るのです。いずれにしても私達の信仰生活にとって大切な学びになります。ご一緒にしっかりと学んで行きたいと思えます。

2: 内容～心の貧しい者は幸い

内容に入って行きます。「山上の説教」は、「八福の教え」と言われる、イエスが「八つの祝福(幸い)」を語られた言葉から始まります。私達が使っている聖書だと、今朝の御言葉は「心の貧しい者は幸いです」(3)と静かな調子の言葉ですが、昔の「文語訳聖書」は、これを「幸福なるかな、心の貧しき者」(3)と訳していました。実は、こちらの方が原文に近い訳なのです。イエス様は「幸いなるかな…」と、まず宣言をされました。それが「八福の教え」です。文語訳ではこうなります。「幸福なるかな、心の貧しき者…幸福なるかな、悲しむ者…幸福なるかな、柔和なる者…幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者…幸福なるかな、憐憫(あわれみ)ある者…幸福なるかな、心の清き者…幸福なるかな、平和ならしむる者…幸福なるかな、義のために責められたる者」と「8つの幸い」が語られる。ですから私達も8つをまとめて学んだ方が良いのかも知れませんが、しかし、1つ1つの意味がとても深いので、今日はその最初の1つ「心の貧しい者は幸いです、天の御国はその人たちのものだから」(3)という、この言葉から学び始めます。

「心の貧しい者は幸いです」、なぜ「心の貧しい者」が幸いなのか。いや、その前に、「心が貧しい」とはどういうことなのでしょう。

「ルカ福音書」には、「山上の説教」に似た「平地の説教」—(イエス様が「平らな所」で語られた説教)—という箇所があります。「平地の説教」も「貧しい者は幸いです」(ルカ 6:20)という言葉から始まります。イエス様の説教は、「貧しさの祝福」を語ることから始まります。ただし「貧しければ良い」と語られているわけではありません。「貧しさ」は、それ自体、大変なことです。ただ、イエス様は、「マタイ福音書」の「山上の説教」においては、「心の貧しい者は…」と言われました。ここでは「心の貧しさ」が問題にされています。しかし「心の貧しさ」が問題にされていますが、それは「平地の説教」の「貧しい者は幸いです」という言葉と、その生き方において深く結びつくのではないかと思います。(詳しいこととお話しする機会があればと思いますが…)。

いずれにしても、では「心の貧しい者」、「心が貧しい」とは、どういうことなのでしょう。

「心の貧しい者」と訳されている言葉は、原文では「霊において貧しい者」という言葉です。「霊」というのは、人間の中で「神と関わり合う部分」です。だからそれは、「神様との関係において貧しい」ということになります。それはどういう意味でしょうか。

この「貧しい」という言葉は、文字通り「徹底的な貧しさ、惨めな貧困」を意味する言葉だと言われます。同じ言葉から「うずくまる」とか「縮こまる」という言葉も生まれているそうです。つまり「人を苛んで萎縮させてしまうほどの貧困」を指します。ですから「心が貧しい者」とは、「神との関係において極度の貧しさの中に生きる者」ということになり、「そういう人が幸いだ」とイエスは言われるのです。言葉の解説のような話が長くなってしまっていますが、この「貧しい」

という言葉は、今申し上げたような意味で、その使われ方—(意味するところ)—が、次のように変化したようです。①それは最初—(申し上げたように)—「極度に貧しい」という意味でした。しかしそれが②「貧しい故に、勢力も、権力も、名誉もない」という意味に変わり、さらに③「勢力がない故に、他人から踏みつけられ、圧迫される、援助もない」という意味に変わり、そして、そこからさらに④「この世から完全に見放されているが故に、全ての希望を神に賭ける人」という意味に変わったのです。ですから「神との関係において貧しい人」というのは、「欠け多い者であることを知る故に、無力であることを知る故に、ひたすら神に寄り頼む人、ひたすら神が助けて下さることに寄り頼む人」という意味で使われるようになったようです。ということは、イエス様が「神との関係において貧しい者は幸いです」と言われた時、それは「自分が全く無力であることを知って、欠けた者であることを知って、だからこそ、ただひたすら神に寄り頼む人、神に助けを求める人は幸いです」と言われたことになります。

では、なぜ、そのような人は幸いなのでしょうか。イエス様は「天の御国はその人達のものだから」と言われました。ここで言われている「天の御国」とは、「死んでから行く天国」のことではありません。今ここにある「神の国—(神の支配の現実、神が力を持って臨んで下さる現実)」のことです。その人たちは「神の支配」「神の現実」を経験する、その中に入って行く、そういうことを、イエス様は言っておられると理解出来ます。

私達が「欠け」、「無力」を感じるのは、どのような領域でしょうか。もちろん物的な欠乏も、時には感じるわけですが、キリスト者として生きる時、一番深刻な欠乏は、「愛の領域」の欠乏ではないでしょうか。マザー・テレサは、来日した時に「日本人は経済的には豊かだが、心が貧しい」と言ったそうです。彼女に言われるまでもなく、私達は決定的に愛に欠けていると言っても良いかも知れません。欠けているというか、愛に生きることが難しい、出来ないという現実があるのではないのでしょうか。自分を見て、そう思います。愛に生きようとする時、自分の貧しさを思い知らされるというか、自分の愛が身勝手な、自己中心的な愛でしかないということを思い知らされます。皆様はいかがでしょう。人が自分に良くしてくれる時はいいですけど、そうでない時はもう愛せない。ちょっとしたことでも愛なんかどこかに飛んでしまう。人間界関係は、みなそうではないでしょうか。

「愛というのは、人の傍らに立つことだ」と言った人がいます。例えば「苦しんでいる人の傍らに立つ」。でもどうでしょうか。自分の力で人の傍らに立つことが、立ち続けることが、出来るでしょうか。三浦綾子の「塩狩峠」という本の中で、主人公の長野信夫は、犠牲を覚悟して、問題を起こした同僚の隣人になろうとします。しかし、実際にその同僚と関わる中で彼にやって来た思いは、「怒り」であり、「憎しみ」であり、どうしても「上からその人を見下ろす思い」であったり、結局相手を受け入れられないという思いでした。そこから彼は、「自分の罪」ということを深く自覚して行くわけです。そして、神の前に悔い改め、自分の力ではなく、神の赦しと神の力を真剣に求めて生きるようになります。繰り返しますが、私達は—(「私達は」と言って良いでしょうか…)—多くの場面で愛において乏しいのではないのでしょうか。{私は生きることある種の恐れがあります。それは、自分の愛が貧しい—(愛に生きられない、犠牲を覚悟出来ない)—というところから来る恐れなのです。自分でも自分にガッカリしますが、それが人に見透かされるのではないかというような、愚かな恐れの中にいることを感じることもあります}。

しかし、本当に自らの貧しさを知る者は、何よりもまず神を求める、神に愛を求めるはずなのです。そうであるべきなのです。三浦綾子さんの話ですが、彼女がこんな文章を書いています。「三浦は—(ご主人の光世さんですが)—13年伏せていた私と結婚してくれたが、その結婚を決意するにあたって『愛を下さい』と祈り求めたという。これを聞いて私は、三浦は私を好きではないのかと寂しく思ったものだが、『愛』とは『好き』などという甘いものではない。真の愛は…神から与えられなければ持ち得ない意思なのである…愛は神に祈り求むべきものなのである」。光世さんの祈りは、本当に自分の愛の貧しさを知っている人の祈りではないかと思いました。しか

し、彼は神に「愛」を祈り求め、そして大変な病気の中を生きる綾子さんを支えて行かれました。彼は言われます。「私の中には愛はない…ない袖はふれない…愛は『愛なる神様』から頂くより仕方がない」。その神から頂いた愛で、彼はその生涯を綾子さんと生きられたのだと思う。自分の欠乏を本当に知る者は、真剣に神に求める、神に求める以外にない、神に必死に求めて、それ故、神の力を経験して行くのではないのでしょうか。

「天の御国」とは、今ここにある「神の国—(神の支配の現実、神が力を持って臨んで下さる現実)」だと申し上げました。愛に限らず、自分の貧しさを、無力を本当に知らされ、それ故に神の助け、神の支配を必死に求める者は、それを経験して行くのではないのでしょうか。ある方が、どうしてもお金が必要だったのです。神様に必死で祈って、その中で親戚の人に借りようという思いに導かれたそうです。しかし、その人の家にお金を借りに行くことは、どうしても出来なかったそうです。そんな時、たまたまバスに乗ったら、その親戚の人が、そのバスに乗っていたというのです。あり得ないことでした。でもそれがあったのです。(神様は凄いです)。世間話から始まったのですが、その会話の中で自然とお金の話をすることが出来て、借りることが出来たのだそうです。神様にどれだけ感謝したことかと、証しをして下さいました。「キリスト教は、あり得ないことが、あり得る世界です」と言った人がいますが、神の支配の現実を経験されたのではないのでしょうか。

「山上の説教」を語られたイエス様は、やがて十字架に掛かって死んで下さるイエス様です。そして神様は、そのイエス様を甦えらせなさいました。十字架と復活によって何が起こったか。

「神の国」が現実になったのです。聖霊が神の力を私達に及ぼして下さることが、聖霊が私達の周りで様々な業を為さる時代が到来したのです。イエス様は、自分の十字架に賭けてこの言葉を語っておられるのです。今も、ご自分の言葉に責任を持って、言葉の後ろに立っておられるのです。私達も、本当に自らの無力、自らの欠けを知り、心の貧しさを知り、心から神に求めて祈り求める時、そして、例えば「愛を下さい、神の御心に生きさせて下さい」と自らを神の前に差し出す時、「神の国」の現実の中で生きて行けるのではないのでしょうか。自分では「とても出来ない」と思っていた、愛に生きることさえ、出来る者として、生かされて行くのではないのでしょうか。「心の貧しい者は幸いです、天の御国はその人たちのものだから(です)」(5:3)。自らの貧しさを心底知り、心から一心に神にすがって行く、そのような信仰生活を歩みたいと願います。